欣喜堂
KOsaki かげ龍爪M

神護寺に参拝したのは、二〇〇六年夏のことである。京都駅からはバスで約五〇分。清滝川に架かる高雄橋を渡り、参道となる三百数十段の石段を登りきると、楓の木立の中に神護寺の立派な山門が見えてくる。この山門は、一六二九年の建築とされる。三間一戸という形式の楼門で、門の両脇には持国天と増長天が安置されている。まさに古刹という言い方がぴったりくる。

神護寺は、平安遷都の提唱者であり平安京造営の推進者として知られる和気清麻呂が建立した高雄山寺がその前身である。山門から入って、右手から山道を進むと和気清麻呂公墓がある。

山道をもどると、和気公霊廟の前の広場に出る。清麻呂の子息である弘世、真綱、仲世は、最澄、空海を相次いで高雄山寺に招き、仏教界に新風を吹き込んでいる。八〇二年、弘世と真綱は比叡山中にこもって修行を続けていた最澄に、伯母である和気広虫の三周忌の法事供養として高雄山寺での法華経の講演を依頼している。

弘世が世を去ったのち、高雄山寺は、弘世の弟の真綱、仲世が外護する空海の時代になった。真綱、仲世は、兄の弘世と同じく、文章生から出発して官吏の道を歩んだ。空海の十数年にわたる活躍によって、高雄山寺が平安仏教の道場としての内容を整えてくると、真綱と仲世は、これまでの和気氏の私寺的性格を格上げすることを考え、高雄山寺と同じころに建てられていた定額寺としての神願寺を合併することを願い出る。

そして八二四年にそれが許され、神願寺がこの地に移されると、寺名も神護国祚真言寺と改名され、すべてが空海に付嘱された。